＜ストーリー＞

(C) 2014-2015 杉浦日向子・MS.HS/「百日紅」製作委員会

文化十一（1814）年、江戸、夏。活気溢れる両国橋の夏の昼日なたを真っ直ぐ歩いて来る意志の強そうな女――お栄。23 歳、浮世絵師。彼女と暮らし、鉄蔵と呼ばれる男、百二十畳敷きの紙に大達磨を描いてみたり、米一粒に雀を二羽描いてみたり…その変ちきな絵師がお栄の父、葛飾北斎だ。

離れてくらす母・ことの家に向かったお栄。母は着の身着のまま暮らす2人の生活を心配する。親父と娘、筆二本、箸四本あれば喰っていける、とお栄は言い切る。庭には満開の百日紅が咲いている。「長い祭りが始まったね」これから訪れる新たな季節に思いを重ね、つぶやいた。

紙や道具が散らばった雑然とした部屋で暮らすお栄と北斎。料理はしない、掃除もしない。ゴミがたまったら引っ越せばいいというその日暮らしの二人。勝手に住みついた居候で無類の女好きでお調子者の池田善次郎（後の渓斎英泉）が、今日も酔っぱらって誰かを連れてきたらしい。

その男は、歌川豊国門下の歌川国直。門下は違えど、北斎のことを尊敬しているという。国直はお栄の顔を見て驚く。いつも両国橋ですれ違う娘が北斎の娘である偶然に驚いたようだ。男共が騒がしい夏の夜、お栄は机で龍の絵と向かい合う。

お栄には、他にも大切な人がいる。生まれつき目の見えない、歳の離れた妹――お猶だ。彼女は琵琶の勉強のため一人離れて尼寺でくらしているが、お栄は妹を大変可愛がっており、今日も尼寺へと足を運ぶ。そして、二人は仲良くお気に入りの両国橋へと向った――。

橋の真ん中で二人が出会ったのは、北斎の門下、売れっ子絵師で男前の魚屋北渓こと岩窪初五郎。顔に墨をつけたままのお栄に初五郎は頬を拭くようにと、手ぬぐいを渡す。照れるお栄。いつもとは違う姉の様子にお猶が気づく。それからお栄は、お猶とともに舟に乗りこむ。風を波を肌で感じ、楽しそうな二人。

季節は冬、雪積もる中、姉妹は三囲神社に行き寒椿をお猶に持たせ、そっとその手を包むお栄。雪遊びにはしゃいで疲れた妹を背負って帰る道で、北斎とすれ違うが父は娘たちに声をかけずに去っていく。中々自分に会いに来ない父のことを「おとっさんに嫌われているのかしら…」と気に病むお猶。お栄は語気強く「鉄蔵は弱虫なんだ。病気が怖いんだよ」と遮る。

お栄の描いた地獄絵を大層気に入ったお武家様の奥方がおかしくなったとの話を萬字堂から聞いた北斎は、彼女の下絵を見て「厄介な絵なんざ、腕が未熟な証拠だ」と言い捨て、すぐに地獄絵を"始末"しにいった。お栄は、まざまざと北斎の腕を見せ付けられる。

梅雨、雨が降りしきる中、お栄は絵の書き直しのために萬字堂のもとへいく。人は描けているが色気がない、という萬字堂の言葉を、黙って聞くばかり。激しい雨の中、彼女はふらりと蔭間茶屋の花埜屋に行き、陰間の吉弥に出会う。引っ張られるがまま部屋へ上がるが、真ん中に枕が二つ並んだ布団が敷いてあり怯むお栄……。

季節は廻り、また百日紅がたわわに咲き散る夏が来た――。わさわさと散り、もりもりと咲く、長い祭りの終わりにはひとつの別れが待ち受けていた――。

＜原 恵一監督インタビュー＞「アニメーションでないと描けない杉浦日向子さんの世界を描きました。」

――以前から杉浦日向子さんのファンだったそうですね。

原　最初に『風流江戸雀』を読んで以来とりこになりまして、いつ杉浦作品をアニメ化したいと思ってきました。今回、ご縁があって『百日紅』を監督しましたが、最初は好き過ぎる作品だけに怖さもありました。でも仕上がってきた映像が非常によいものになっているので、今はもう安心しています。

――これまでの原監督の作品と今回の『百日紅』が違うところはありますか？

原　僕の映画で登場人物が泣かないのは久しぶりです（笑）。そこは杉浦さんの作品の特色なんです。演出が押しつけがましくない。カラッとしている。にもかかわらず深い感動を与えてくれる。それは目指すべき演出として自分の中に刻まれていますね。

――すると過去の作品の中にも杉浦作品の影響があったりすんでしょうか。

原　ありますね。わかりやすい例を挙げると『河童のクゥと夏休み』で東京タワーの上に龍が現れるシーンがあるんですが、あれは『百日紅』やほかの龍が出てくる杉浦作品を読んでいなければ、描かなかったと思います。あと「白木蓮の花がポタポタ落ちる」というシーンは、実は『映画 クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶアッパレ！ 戦国大合戦』の中で引用させていただいてもいるんです。

――主人公のお栄と妹のお猶、そして北斎の距離感の描き方は、人と人の間合いを丁寧に描く原作品らしいポイントですね。

原　原作からどのエピソードを選ぶかは悩みどころでした。結局、単行本3巻の最後に収録されていたお猶のエピソードをピックアップし、お栄とお猶の姉妹関係を縦軸にして構成しました。お栄という主人公は芯の強さが魅力です。でも杉浦さんはそれをこれみよがしに描いてはいない。そこを大事にして、映画を見ている方にお栄の心の中の怒りや、喜びや、悲しさを感じていただけるようにと思って作りました。お栄と年齢の近い女性の方に共感していただければと思っています。

――非常に原作を大切にアニメーション化されたのですね。

原　そうです。冒頭には、両国橋から一気に俯瞰で江戸の全景を見せるアニメーションでないと描けないようなカットもあります。でも江戸時代を再現することが今回の目的ではないです。「正解は原作の中にある」という姿勢で、原作の空気感をいかにアニメとして表現するかが一番の目標でした。季節の移り変わりなど自分の映画の中では一番華やかな映画になったと思います。非常に手応えを感じているので、公開を楽しみにしていてください。

■監督：原　恵一

1959年生まれ。群馬県出身。『映画 クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ モーレツ！オトナ帝国の逆襲』（01）、『映画 クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶアッパレ！戦国大合戦』（02）が高い評価を受け大人も楽しめるアニメを確立。『河童のクゥと夏休み』（07）など、丁寧な日常描写が特徴。『嵐を呼ぶアッパレ！戦国大合戦』で第6回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門大賞などを受賞した。現在新作を制作中。